

最優秀賞

## 脱皮

和歌山県 近畿大学附属和歌山中学校三年 笹井 春花

あれ……何だろう、夕暮れの庭の片隅でのそのそ動いている昆虫を見付けた。よく見ると地中から今、這い出したばかりのミンミン蝉の幼虫である。私は蝉の羽化の様子を見たことがないので、観察することにした。

幼虫は、約十分間そこらを歩き回った末、自転車のスタンドを伝い、タイヤを上へ上へと登って行く。荷台にたどりついたところで、芝の上に転落し、しばらくは動かなかったが、また這い出し、今度は側の鉢植の柎に取り付いた。約二十分間、まるで脱皮に最適な場所を探すように太い幹から細い枝先へと動き回り、葉っぱの殆んどない枝の最先端に仰向きにぶら下がった。しばらくは枝の感触を確認するかのように時折足を動かしていたが、微動だにしなくなった。いよいよ羽化の態勢に入ったようである。私は緊張するとともに徹夜を覚悟したが、意外にも二十分後には頭に近い背中の殻が浮き始めた。最初の状態より倍ぐらいの大きさになったところで、頭、前足、それにまだ羽根とは見えにくい巻き巻きした薄緑色の羽根の部分が現われた。次いで二、三番目の足が出る。

お尻の部分だけを殻の中に残し、逆宙吊りの形で時々足を動かすが殆んど動きがない。しかし巻き巻きになっていった薄緑色の羽根は、少し広がり透明な羽根に緑色の脈が確認できる状態になった。五分後、羽根が完全に開くと逆宙吊りから頭を起こし、懸命にまだお尻の抜けていない元の殻に取り付こうと足を動かす。“がんばれ、がんばれ”私は心の中で応援した。

やっとの思いで殻に取り付いた幼虫は、すっぱりとお尻を抜き取り、完全に脱皮して成虫となった。

卵から七年前後地中で過ごし、今日這い出して

目の前で成虫となったこの蝉は、私が七才ぐらいの時から地中にいたことになる。

長い年月を経て脱皮という最後の大事な仕事を成し、立派な蝉の誕生である。ピツタリと格好よく体に張り付いた羽根には精悍な感じさえした。この光景に胸が熱くなった。心がゆさぶられ、鳥肌が立った。

地上に出て成虫となっても、宿命とはいえ一週間程度の命と言われる。地上での束の間の生涯、結果はどうあれ、ベストを尽くす、生きるために逞しく努力する、そんな蝉の姿に、大きな感動を覚えた。

私は、今まであまり感動を意識したことはない。しかし、この脱皮の姿に感動し、この蝉の短いひと夏の生涯が無事であることを祈った。

わずか五センチ足らずの小さな虫から、生命の尊さと、生きるための懸命な努力を学び、生き物を思いやる優しさを、芽ばえさせてくれた思いであり、私の心の中の何かも、成長に向けて脱皮した夏である。

あの蝉の殻は、今も柎にぶら下がっている。

